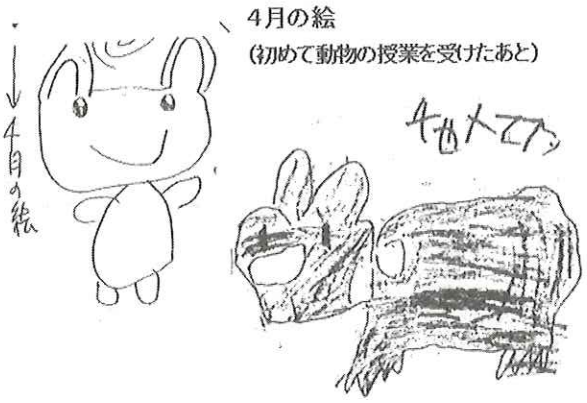


3学期　3年への飼育引き継ぎ集会

なんですけれども、左の方に楽しかったことベスト３と書いてありますね。第３位が、動物をさわったこと、抱っこできたこと。第２位が、エサを切ってあげたりしたこと。第１位は何だと思いますか？これは、動物が健康だったとき、だと思います。そういうことが子どもたちはすごく嬉しかったということです。実際に見に行って動物たちが元気だとホッとしたっていうんですね。健康かどうかは、子どもたちはよくウンチの状態で見ていました。それから、ヒヨコの誕生の時なども、いつも見に行ってて、チャボのウンチの中に細いウンチがあるんですけれども、「これはヒヨコのウンチだ。間違いない」と言って、大事そうに持ってきたりだとか、「ヒヨコって飛びながらウンチするんだね」などと、ウンチの話題には１年間事欠きませんでした。というように、健康ならば嬉しい、ということが１位でした。これはすごく当たり前のことだけれども、すごく大事なことを勉強したね。と子どもたちに声をかけてあげました。

この写真は、野菜の切り方を説明しているところです。これを実際にやっている女の子の話なんですが、この子は動物の毛のアレルギーがあって、動物にさわらせないようにとお母さんから言われていました。でも、「私は野菜の切り方だったら説明できるよ」と言って、この役を買って出てくれたんです。また、話を聞いている３年生にも、「ウサギさんにやってごらん。食べるよ」とか説明していました。

次の写真は、３年生に抱っこの仕方を教えてあげたり、散歩のしかたを教えてあげたりしているところです。「このウサギの名前はアレックスっていうんだよ」とか、「イエローはこっちだよ」、「こういう性格だよ」というようなことを、３年生に教えています。

それから、集会の時には、会場の周囲に絵を貼りました。図工の先生もとても協力的な方で、３学期の図工の題材として取り上げていただきました。

４月当初、獣医師の先生のお話を聞いた直後に描かせた絵が、こんな絵でした。ところが、３学期には同じ絵を描かせたんですが、すぐに描いてしまうんですね。そこで、図工の先生も「手紙風に、愛情たっぷりに１年間育ててきたエピソードなんか書いたらどう？」などとおっしゃってくれて、すらすらと文の方も書けて、１枚１枚見るとすごく味があるものになりました。そして、子どもたちはすごく大事そうに家に持って帰りました。

この写真は、動物の写真を指して、１匹１匹の性格を説明しているところです。また、この子が持っている図は、ウサギたちの愛情関係を示しているものです。愛情関係のもつれなどもあったんですが、そういうエピソードも話してくれたりしました。

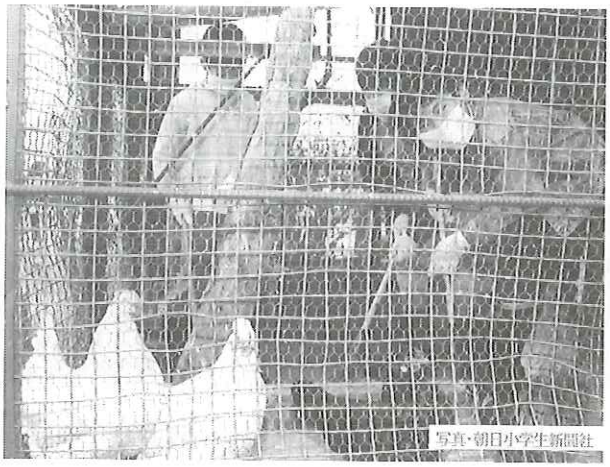
この写真も子どもが撮ったもので、私などが撮るよりもすごくいいアングルで撮っています。撮るときにも優しい声かけをしていました。

この写真が、鳥インフルエンザが去年あったときのものです。対処のしかたについては、もちろん獣医師の先生にも指導を受けます。それによって飼育の方法が少し変わりましたので、その説明をしているところです。台本を自分たちで書いて、身支度をするところから３年生に見せていて、「鳥の命を守ってね」という言葉をかけていました。やはりそのときには、保護者の方からも不安であるというような言葉や、飼育に対する疑問なども寄せられていましたので、私たち学校側としても、すぐに獣医師さんと連携をとって、対処しま

した。中川先生もすぐにその日にとんできてくださいまして、私は体育の授業をやっているときだったんですが、「みんなに大事な話があります」ということで、体育の授業が飼育の授業に変わりました。そこで、中川先生が、「正しい知識をもって、冷静な対応をすることが大切です」というような、詳しい説明をしてくださったので、子どもたちも安心して、「家の人にそう話すよ」などと言っていました。中川先生も、「鳥さんたちは今元気なんだから、みんなで守っていってね」とおっしゃると、子どもたちもうなずいていました。

この写真は、子どもたちが一生懸命に飼育に取り組んでいるということで、何件かの新聞社の取材があったときのものです。取材の記者の方にも、子どもたちは自信をもって答えていました。その写真（朝日小学生新聞）をお借りできたのです。そのときにおかしかったのは、子どもたちは新聞社の方に、「ここのニワトリはインフルエンザにはかからないよ」と言うんです。「だって、僕たちが世話しているんだから大丈夫」なんていうふうに自信をもって言っていました。

この飼育引き継ぎ習慣のあと、空白の１か



月があるとまずいので、３年生のクラスと一緒に世話をする、見習い期間を設けました。そして、３月３１日まで飼育を続けて、３年生にバトンタッチしました。今年の４年生もとても一生懸命に飼育していて、この暑い夏を乗り切りました。お母さんたちも一生懸命に協力してくれました。

このように、どこの学校でも行っているような飼育活動のお話をいたしました。

最後に、私も理論的な、科学的なことはわからないことも多いんですが、一応、１単元として、飼育活動を設定しました。そのなかで、以前、不登校ぎみだった子どもたちもクラスの中にはいたんですが、そういう子どもたちも飼育は大好きなところもありました。それから、辛いことがあったとき、「飼育小屋にいってもいい」などと言う子どももいたり、友だちづきあいがよくできない子が、休みの時の飼育を引き受けてくれたり、そのときに同じ飼育当番で来てくれた子と、遊ぶようになって、友達関係に広がりができたという場面もありました。そのほかにも、国語の授業の題材として取り入れたり、図工などの題材にも飼育活動が使えたりすると思います。人権尊重という点もあるんですが、いろいろなドラマがありました。ドラマというのは時を選んでくれません。そして、動物も自分の思うとおりには動いてくれませんし、人も自分の思うとおりには動いてくれません。これは、他者を理解するということの原点なのではないかと思います。そういうことを子どもたちは身をもって体験して、「動物たちは自分たちとは違う。だけど共生していかなければならない」ということを理解できた１年間だったのではないかと思います。人権尊重教育を推進していることから考えても、飼育活動は意義のある活動だと思いました。そして、愛情だけではやっぱりだめで、科学的

な目というもの、なぜ死産があったのかということや、なぜ怪我をしてしまったのか、というような目ももっていなければいけないんだということを感じました。あと１０年くらいすると親になる子もいるかもしれません。そういうときにこのような活動はすごく役に立つものではないかと思います。

もっとたくさんお話ししたいことがありますが、つたない１年間の経験をお話ししました。今年の４年生の担任の先生もこの会場に来てくださっているんですが、このように学校が一丸となって取り組んでいます。このようなことは、ごく普通の公立の小学校では大事なのではないかと思います。以上で終わります。